

# 子どもたちにとって必要なことを考えていきましょう。

こんな気持ちになっていませんか？

まさか、  
こんなことが！？

## ＜驚き・ショック＞

きょうだい間で性暴力があったということを知ったときには、あまりのショックに、信じられないとか、受け入れられないと思われたことでしょう。

「なぜ、こんなことが起きたのだろう」「仲のよいきょうだいだったはずなのに」と、混乱されたかもしれません。ショックのあまり、体調を崩してしまうことも少なくありません。

家庭のなかで  
起きたことだし、  
たいした  
ことではない

## ＜否認・問題の軽視＞

ショックが大きいと、つい問題をなかったことにしてしまいたくなる気持ちが生じがちです。「家庭のなかで起こったことだから」「親がしっかり叱ってやめさせればいい」と、問題を表ざたにすることへの抵抗感をもつ家族もいます。しかし、被害を受けた子どもは、相手がきょうだいだからこそ、逃げられず、つらい思いをしています。また、加害をした子どもも、自分のしたことは性暴力であり、いけないことだと学び、適切な指導を受ける必要があります。

## 性的な遊びと性暴力、どこが違うの？

年齢差や体格差など発達の違いのあるきょうだい間での性的な接触や行為(からだや性器を触る、風呂やトイレをのぞく、下着をとるなど)は、遊びではなく性暴力です。

年少のきょうだいが被害者になることが多く、性的な接触や行為を断れなかったり、意味がよくわからないまま応じていたりすることがあります。脅しや口止めをされて、だれにも言えずにいることもあります。

身近なきょうだいからの性暴力により、被害者は混乱し、恐怖や苦痛、不安を感じます。

まずは、きょうだい間で性暴力が起きたという事実を認めることが大切です。  
家族だけで解決しようとせず、専門家のケアを受けながら対応していきましょう。

気づいてあげられ  
なくて、ごめんね…

## ＜自責感・自信喪失＞

保護者は、「気づいてあげられなくて申し訳なかった」という気持ちになったり、「自分の育て方が悪かったのではないかと自分を責めたり、親としての自信を失ったりすることがあります。

なんで、  
そんなことを  
したの！

## ＜怒り・にくしみ＞

性暴力をふるった子どもに対して、許せないという強い怒りや、ときには憎しみすら覚えるかもしれません。

一方、被害をうけた子どもにも、「どうしてすぐに言わなかったの!」「なぜ、逃げなかったの?」と責めたくてしまう気持ちが生じるかもしれません。

保護者としては、どちらも大切な子どもであるため、複雑な気持ちになります。

子どもを守るために保護者ができることはたくさんあります。  
事実を受けとめ、子どもたちのためにできることをしていきましょう。



## 子どもたちのためにできること

### 1 再び性暴力が起こらないように、家庭内の安全を確保していくことが第一

子どもが再び被害を受けることのないよう、すぐに**安全な環境をつくる**必要があります。

場合によっては、加害をした子どもを、一時的に家庭外の施設や親戚宅などに預けることを考えなければなりません。そうしたからといって、それはその子どもを見捨てることではありません。いつまた家庭内で性暴力が起こるか分からない状況では、どちらのきょうだいのケアも始められないのです。

まずは安全な家庭環境をつくることは、サポートを始めるための前提条件です。

家族がまた一緒に暮らせるようになる時期や条件は、被害を受けた子どもの気持ちを第一に考えながら検討します。

場合によっては、長期にわたって、家族と一緒に暮らせないこともあるでしょう。それでも、**被害を受けた子どもの回復を第一に考える**ことで、結果的には、加害をした子どもも、自分がした行動の責任を学んでいくのです。

すぐには解決しないことがたくさんあります。保護者は焦らずに、少しずつ進んでいきましょう。

### 2 被害を受けた子どもの理解とサポート

きょうだいから性暴力を受けたことで、**子どもはとても混乱しています**。

恐怖や嫌悪感だけでなく、きょうだいだからこその親しみの感情もあるため、さまざまな気持ちの間で引きさかれそうになるからです。

被害を受けたあとも、「言わなければよかった」「自分のせいで、大変なことになってしまった」と自分自身を責めてしまいがちです。

被害のあと、何でもないようなふりをしたり、勉強やスポーツなどを今まで以上にがんばる子どももいます。「自分さえがまんすれば、また以前のような家族に戻れるのだ」という期待や、「親に心配をかけたくない」という自責感や申し訳なさを感じていることがあるからです。

**本人が悩みを打ち明けやすい関係**をつくるのが大切です。そして、子どもの気持ちや状態を理解し、できるかぎりのサポートをしてください。子どもが見守られているという**安心感と安全感を高める**ことが大切です。

性暴力を受けたことにより、頻繁に自慰行為(性器いじり)をしたり、性的な話や性行動に関心を持つようになることもあります。

思春期を迎えてから、不安定な性的関係をもったり、不調になったりすることもありますので、**長期的に様子を見守って**ください。



## 性暴力を受けた子どもにみられやすい反応

- 落ち着きがなくなる
- 夜眠れない、悪夢を見る
- 食欲がなくなったり、食べ過ぎたりする
- 赤ちゃん返り(指しゃぶり、おねしょ)
- 加害者に似た人をこわがる
- 口数が少なくなる
- 学校に行きたがらない、成績が下がる
- 以前楽しめていたことに興味を示さなくなる
- ちょっとしたことでも怒る
- 自分のからだを傷つける(自傷行為)
- 過剰にいいこになろうとしてがんばる
- 年齢不相応の性的な関心や性行動がみられる

被害を受けた子どもに責任はありません。  
「よく話してくれたね」「あなたが悪いんじゃないよ」と伝えてください。